



秋の深まりとともに、人間科学研究所の研究も深まってきました。  
いよいよ今秋からは、7つのテーマのうち残る2つのテーマ、  
「心理療法からみる現代の危機」と「性的差異の社会的未来」  
をめぐる研究活動がスタートしました。  
ニュースレター第10号では、  
その第一弾となる研究会の様をお伝えします。







## 研究会報告

この秋からテーマ「性的差異の社会的未来」が始動しました。上村くにこ氏がコーディネーターを務め、「神話」「歴史」「現代」の3つを軸に、ジェンダーと暴力の問題を追及していきます。このテーマでの研究会第1回目は、精神科医であり、医療人類学やジェンダー・セクシュアリティの視点からトラウマについて研究されている宮地尚子氏をお招きしました。宮地氏は、写真に記録された拷問の様子やアートの中に表象された性的な傷つきを多数参照しながら、なぜ性暴力被害がほかの被害よりもトラウマを引き起こしやすいのか、その要因について講じていかれました。

まず、アブグレイブ収容所で米国兵士が行ったイラク人捕虜への拷問の写真が示されました。性暴力被害がトラウマになりやすい要因のひとつに「恐いことがわかってもらえない」ということがあります。すなわち、実際の恐怖をとまなう性暴力とはかけ離れているポルノ的情景を想像されやすく、それらと混同されてしまうということです。精神的なダメージは、実際に何が起きたかではなく、どのように感じさせられたかによってもたらされるものです。宮地氏は、侵襲性や暴力性が外から理解されにくいという点は、性暴力被害と拷問被害に共通するものであるとし、アブグレイブの写真は、見る者にそれを実感させるだけのインパクトを持っていました。

次に宮地氏は「自己の身体が再体験の源になりやすい」という要因を指摘します。自らの身体が被害体験をたびたび呼び覚ましてしまうことは、それだけでも大きな苦痛です。さらにそれが、被害体験のフラッシュバックであることを認識できないと、自分の身体の方に原因があるのではないかと誤解して、自己嫌悪、自己不信につながることもあります。ここでは葛飾北斎の「蛸と海女」やダウン症で聴覚障害も持つアーティスト、ジュディス・スコットの“Touching Feeling”などが紹介されました。触覚とは非常に繊細な領域です。人は触れあいを求め、触れあいは癒しにもつながると考えられます。そして、性愛とは本来その繊細な領域でお互いの思いを確かめ合うものでしょう。しかしだからこそ、望まない相手から「触れあう」ことを強制された傷つきは深刻です。自分の皮膚にその記憶がこびりつき、ことあるごとに思い出されるために、それから逃れることは困難になってしまいます。しかし性暴力被害者の触覚性フラッシュバックは見逃ごされがちであり、トラウマと触覚を関連づけた研究も非常に少ないのです。宮地氏は、美学でも伝統的に眼差すことによって対象と距離を取り、対象を支配することが重要とされてきた点を指摘しました。一方で触覚や皮膚はもっとも距離が取りにくいものであり、視覚よりも軽視される傾向があったと言えます。

さらに「秘密は『化膿』しやすい」という要因が指摘されました。性暴力には「公にすると『差別』される」という構造が存在します。「傷もの」というレッテルを貼られ、汚れや恥の感覚が加害者ではなく被害者に与えられることで、被害者は名乗り出られず、語ることもできない状況へと追い込まれるのです。そして、秘密にすることで意味づけが強化されたり、秘密を共有する唯一の人物が加害者であることで傷が深まったりすると言えます。「従軍慰安婦」だった女性の経験はその典型例の一つでしょう。「慰安婦」の写真、彼女たちの傷を表象した嶋田美子やカン・ドッキョンの作品が示されました。カン・ドッキョンの作品に描かれた女性たちは皆、顔を手で覆い、身体を縮めています。宮地氏はこれを恥ずかしいのではなく、これ以上の傷付きを避けるため、自分の心身に刺激が入らないようにする積極的な姿勢であると説明します。

続く後半のディスカッションでは、北原恵氏に指定討論者として加わっていただきました。北原氏からは、日本における敗戦のトラウマの再構築化との関連や「トラウマを治す」とはどういうことかといった視点が示されました。それらを巡って、中井久夫氏（兵庫県こころのケアセンター所長）をはじめとする多数のフロア参加者も発言され、多角的なディスカッションが展開されました。

## 暴力・ジェンダー・アート 性的な傷つきと表象



講師：宮地 尚子

(一橋大学社会学部／文化精神医学、医療人類学、ジェンダーとセクシュアリティ)

指定討論：北原 恵

(甲南大学文学部／表象文化論、美術史、ジェンダー論)

企画：上村 くにこ

(甲南大学文学部／神話論、ジェンダー論)

森 茂起

(甲南大学文学部／臨床心理学)

日時：2006年9月29日（金）

場所：18号館3階 講演室



# 開<sup>ひら</sup>けとしての 変性意識状態



講師：垂谷 茂弘  
(舞鶴工業高等専門学校／人間論、哲学)

企画：横山 博  
(甲南大学文学部／精神医学、ユング心理学)

日時：2006年10月20日(金)

場所：18号館3階 講演室

2006年度秋より、当研究所の7つの研究テーマのうちのひとつ、「心理療法からみる現代の危機」共同研究が本格的に始まりました。コーディネートを担当するのは、精神医学とユング心理学を専門とする横山博教授。日々大学の教壇に立ちながら、精神科医として臨床活動にもあたっている横山氏は、現代の心理臨床という営みを問い直すための切り口として、「宗教」と「超越性」を選びました。これから来年夏の公開シンポジウムに向けて、内外の研究者の協力をあおぎながら、現代における心理療法のあり方を問い直し、未来に向けて進むべき道を探っていきます。第一回の研究会となる今回は、人間論・哲学の立場から宗教と心理療法の影響関係を研究されている垂谷茂弘氏を講師としてお招きしました。

近代の訪れとともに、「社会」と「身体」と「心」はそれぞれ別のものとして単独に扱われるようになりました。現代、その傾向はますます強くなる一方です。人間という存在全体への配慮であるべき医療においても、身体は物質に、心は心理という閉じられたシステムに還元され、「いのち」全体の姿はますます見えにくくなっています。

医療の原型は、シャーマン(シベリア)、メディスン・マン(北米)、巫医(中国)などと呼ばれる人たちが司る原始宗教にあるといわれています。原始宗教はトランス(憑依状態)を利用し、病者を非日常的な現実に触れさせることで治療を行います。シャーマンには、一歩間違えば人々を異常な状態に陥らせかねない集団トランスの状況に身をおきながら、それを癒しの方向へ導くという希有な力が要求されます。その能力を得るために、シャーマンはまず自身が精霊という「私」を脅かすものに身を曝して傷を受け、そこから生還してこなくてはなりません。それにより、精霊を操るのでも、それに操られるのでもない、いわば受動性と能動性の中間にある態度が可能になるのです。

近代における心理療法の発展の歴史は、この原始宗教から受動性の要素を切り捨てる過程だったといえるかもしれません。それは、いかに効率よく安定したかたちで癒しの技を行なうかという、技法や理論の洗練化の過程です。社会におけるサービスのひとつとして心理療法が成り立つために、ある程度の効率化は必要です。しかし心理療法とは、効率化すればするほど、不可避免的に人間という存在や他者の痛みへの軽視を招いてしまうことを運命づけられたものでもあります。

垂谷氏は、このパラドックスを打開する方向性を、心理療法に様々な形で取り入れられている「変性意識状態」に見出そうとします。変性意識状態とは、催眠状態など日常の意識状態とは異なる意識の状態を指す総称です。垂谷氏は、精神分析の創始者であるS.フロイトの提唱した「平等に漂う注意」という態度をとりあげました。フロイトは、被分析者の話す内容を先入見や予断によって取捨選択せず、「単に聴く」ことの重要性を主張しています。それにより、素材は無意識的記憶に委ねられやすくなります。これはいわば半分眠りながら聴くという態度に近いものであり、シャーマンの目指した受動と能動の中間にある態度に通じるものがあります。また、当研究所の研究員でもある精神科医、中井久夫と山口直彦が治療的な態度として重視しているのもこれに近いものです。それは、とらわれない心の状態、「無我」に近い態度のことです。中井は、診察は「俺が、俺が」という感じがある時にはうまいかないものだとしばしば語っています。それは自分を消し去るのではなく、「空間の一部に溶解するような感覚」だといいます。

フロイトは、心を欲望の体系として見ることによって、自己欺瞞を排し、「我性」を打ち破ろうとしました。しかし、オカルト化を避けようとするあまり、精神分析を「霊性」の方向から遠ざけてしまいました。しかし垂谷氏は、宗教学の立場から、「霊性への開けがないかぎり、いのちの根源的な基礎づけは不可能」だと断言します。

フロイトが宗教を痛罵しながらも、「平等に漂う注意」という一種の変性意識状態を自らの治療「技法」に取り入れたことは、心理療法と宗教がともに心の癒しを目指すものとして、不可分の関係にあることを示していると言えるのかもしれません。垂谷氏は、心理療法家に対して、「霊性」に対しても「平等に漂う注意」を払い、そこから自らを閉ざすことのないように、と呼びかけました。



## これまでの活動

### 研究会

#### 第31回 男の子育て——中間世界の喪失と男の生き方を中心に

開催日：2006年6月9日（金）  
講師：汐見 稔幸（東京大学／教育学）  
企画：高石 恭子（甲南大学／臨床心理学、学生相談）

#### 第32回 ブランディング戦略とデザイン

開催日：2006年7月7日（金）  
講師：谷本 尚子（近畿大学非常勤講師／機能科学）  
企画：川田 都樹子（甲南大学／美学、芸術学）

#### 第33回 暴力・ジェンダー・アート——性的な傷つきと表象

開催日：2006年9月29日（金）  
講師：宮地 尚子（一橋大学／文化精神医学、医療人類学）  
指定討論：北原 恵（甲南大学／表象文化論、美術史、ジェンダー論）  
企画：上村 くにこ（甲南大学／神話論、ジェンダー論）  
森 茂起（甲南大学／臨床心理学）

#### 第34回 開けとしての変性意識状態

開催日：2006年10月20日（金）  
講師：垂谷 茂弘（舞鶴工業高等専門学校／人間論、哲学）  
企画：横山 博（甲南大学／精神医学、ユング心理学）

### その他の企画

#### 第4回 園芸療法研修会

環境デザインを通して見る「植物」「身体」「都市」  
——小さな植木鉢から都市のアイロニーとしての  
ピオトープのデザインまで

開催日：2006年11月10日（金）  
講師：伊東 啓太郎（九州工業大学／植物生態学、環境デザイン）  
企画：高石 恭子  
共催：甲南大学学生相談室

#### 市民フォーラム 育てることの困難

開催日：2006年11月12日（日）  
企画：森 茂起

## これからの活動

### 公開シンポジウム

#### 第8回 心理療法と超越性（仮題）

開催日：2007年7月22日（日）13:00～17:30  
場所：甲南大学5号館511教室  
シンポジスト：河合 俊雄（京都大学／臨床心理学、ユング心理学）  
木村 敏（河合文化教育研究所／精神医学）  
上村 くにこ（甲南大学／神話論、ジェンダー論）  
鎌田 東二（京都造形芸術大学／宗教哲学、神道学）  
指定討論：垂谷 茂弘（舞鶴工業高等専門学校／人間論、哲学）  
横山 博（甲南大学／精神医学、ユング心理学）  
司会：森 茂起（甲南大学／臨床心理学）  
企画：横山 博  
※詳細が決まり次第、随時ホームページ等でお知らせします。

### 研究会

#### 第35回 心理療法における超越——超越の不可能性と現実

開催日：2006年11月17日（金）  
講師：河合 俊雄（京都大学／臨床心理学、ユング心理学）  
企画：横山 博

#### 第36回 語りはじめた男たち——ホットライン・グループワーク

開催日：2006年12月4日（月）  
講師：濱田 智崇（甲南大学人間科学研究所、『男』悩みのホットライン／臨床心理学）  
千葉 征慶（メンズサポートルーム／臨床心理士、産業カウンセラー）  
企画：上村 くにこ

#### 第37回 タイトル未定

開催日：2006年12月22日（金）  
講師：鎌田 東二（京都造形芸術大学／宗教哲学、神道学）  
企画：横山 博

#### 第38回 ギリシャ悲劇に現れる暴力の分析

開催日：2007年1月26日（金）  
講師：上村 くにこ（甲南大学／神話論、ジェンダー論）  
饗庭 千代子（甲南大学国際言語文化センター／神話論、フランス文学）  
企画：上村 くにこ

#### 第39回 タイトル未定

開催日：2006年2月（未定）  
講師：横山 博（甲南大学／精神医学、ユング心理学）

発行年月日：2006年11月17日



### 編集後記

日一日と秋が深まっています。秋は刈り入れの季節。つやつやと輝く新米はこの季節だけの楽しみです。人間科学研究所の共同研究プロジェクトも4年目の後期に突入り、刈り入れの季節が近づいています。新米に負けないみずみずしい刺激に満ちた研究成果を収穫できるよう、あと少し、丹誠込めて育てていきます。